

新構造設計特記仕様 その2

※修正箇所は下線を引くこと
適用は ■ 印を記入する。

9. 鉄筋コンクリート工事

(1) コンクリート

鉄筋コンクリート工事の施工に関しては記載無きは、JASS 5 2015 による。
(a) コンクリートの仕様
本仕様書では、JASS 5に規定する普通骨材を用いた一般仕様のコンクリートを「普通コンクリート」と定義し、表9.1に示す様に設計基準強度が36N/mm²以下のコンクリートについてはJASS5の3節～11節を適用し、36N/mm²を超えるコンクリートについてはJASS5の17節（高強度コンクリート）を適用する。また、設計基準強度もしくは品質基準強度と構造体強度補正値から定める調合管理強度以上とし、発注するレディーミクストコンクリートの呼び強度が表9.2に示すJIS規格外となる場合は、法第37条の大径認定を受けた製品を用いる必要がある。
軽量コンクリートについてはJASS 5の14節によること。

表9.1 コンクリート圧縮強度(N/mm²)に応じた仕様書の使い分け

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|----------|----|----|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 設計基準強度 F _o | 18 | 21 | 24 | 27 | 30 | 33 | 36 | 39 | 42 | 45 | 48 | 51 | 54 | 57 | 60 |
| JASS 5での区分 | 普通コンクリート | | | 高強度コンクリート | | | | | | | | | | | |

表9.2 レディーミクストコンクリートのJIS規格品

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 調合管理強度(N/mm ²) | 21 | 24 | 27 | 30 | 33 | 36 | 39 | 42 | 45 | 48 | 51 | 54 | 57 | 60 | 60超 |
|----------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|

呼び強度 (JIS規格品)

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 呼び強度 | 21 | 24 | 27 | 30 | 33 | 36 | 40 | 42 | 45 | 50 | 55 | 55 | 60 | 60 | ※ |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|

※印は規格外

(b) 品質と施工

- 構造体の計画供用期間の級は特記による。特記が無い場合は標準とする。
 □ 標準 □ 長期 □ 超長期
- コンクリートは JIS A 5308 (レディーミクストコンクリート) に適合するJIS認証工場の製品とする。
- 設計基準強度が 36 N/mm²を超えるコンクリートを扱うレディーミクストコンクリート工場は、「高強度コンクリート」の製品認証を受けているか、建築基準法第37条第二号によって国土交通大臣が指定建築材料として認定した高強度コンクリートの製造工場とする。
- レディーミクストコンクリート工場および高強度コンクリートを打設する施工現場には、コンクリート主任技士またはコンクリート技士、あるいはこれらと同等以上の知識経験を有すると認められる技術者が常駐していなければならない。
- 施工者は、工事に先立ち、コンクリートの調合・製造計画、施工計画、品質管理計画書を作成し、工事監理者の承認を得ること。
- フレッシュコンクリートの流動性は、スランプまたはスランプフローで表し、設計基準強度が 36 N/mm²以下 33 N/mm²以上の場合スランプ21cm以下、33 N/mm²未満の場合スランプ18cm以下とし、設計基準強度が36 N/mm²超 45 N/mm²未満の場合はスランプ 21 cm以下またはスランプフロー 50 cm以下、設計基準強度が 45 N/mm²以上の場合はスランプ 23 cm以下またはスランプフロー 60 cm以下とし、特記による。
- コンクリートに含まれる塩化物量は、塩化物イオン量として 0.3 kg/m³以下とする。
- コンクリートの練混ぜから打込み終了までの時間は、原則として120分を限度とする。
- コンクリート打込み時の自由落下高さは、コンクリートが分離しない範囲とする。
- 打継ぎ部は構造的に影響の少ない位置を選び打継ぎ処理を行い、打込み前に十分な水湿しを行う。
- 打込み後の湿潤養生の期間は、セメントの種類および設計基準強度に応じて3日以上とする。

(c) 調合および構造体コンクリート強度

- i) 高強度コンクリート
- 調合強度を定めるための基準とする材齢は、特記による。特記のない場合は 28日とする。
 - 構造体コンクリート強度を保証する材齢は、特記による。特記のない場合は 91日とする。
 - 構造体コンクリート強度は、次の①または②を満足するものとする。
 - ① 標準養生した供試体による場合、調合強度を定めるための基準とする材齢において調合管理強度以上とする。
 - ② 構造体温度養生した供試体による場合、構造体コンクリート強度を保証する材齢において設計基準強度に 3 N/mm²加えた値以上とする。
 - 調合管理強度は、以下による。

$$F_m = F_o + mS_n \quad (N/mm^2)$$

$$F_m : \text{高強度コンクリートの調合管理強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$F_o : \text{コンクリートの設計基準強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$mS_n : \text{高強度コンクリートの構造体強度補正値で JASS 5 による。}$$
 - 調合強度は標準養生供試体の圧縮強度で表すものとし、下記の両式を満足するように定める。

$$F \geq F_m + 1.73\sigma \quad (N/mm^2)$$

$$F \geq 0.85 F_m + 3\sigma \quad (N/mm^2)$$

$$F : \text{高強度コンクリートの調合強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$\sigma : \text{高強度コンクリートの圧縮強度の標準偏差 (N/mm}^2\text{) で、レディーミクストコンクリート工場の実績による。実績がない場合は、} 0.1(F_o + mS_n)\text{とする。}$$

ii) 普通コンクリート

- 調合を定めるための基準とする材齢は、原則として 28日とする。
- 構造体コンクリート強度は表9.3を満足すれば合格とする。

表9.3 構造体コンクリートの圧縮強度の判定基準

| 供試体の養生方法 | 試験材齢 ⁽¹⁾ | 判定基準 |
|---------------------|---------------------|--------------|
| 標準養生 ⁽²⁾ | 28 日 | $X \geq F_m$ |
| コ ア | 91 日 | $X \geq F_q$ |

ただし、X：1回の試験における3個の供試体の圧縮強度の平均値 (N/mm²)
 F_m ：コンクリートの調合管理強度 (N/mm²)
 F_q ：コンクリートの品質基準強度 (N/mm²)

- [注] (1) 早い材齢において試験を行い、合否判定基準を満たした場合は、合格とする。
 (2) 工事監理者の承認を得て、供試体成型後、翌日までは20±10℃の日光および風が直接当たらない箇所で、乾燥しないように養生して保管することができる。
 * 標準養生供試体の代わりにあらかじめ準備した現場水中養生供試体によることができる。その場合の判定基準は材齢28日までの平均気温が20℃以上の場合、3個の供試体の圧縮強度の平均値が調合管理強度以上であり、平均気温が20℃未満の場合は、3個の供試体の圧縮強度の平均値から 3 N/mm²を減じた値が品質基準強度以上であれば合格とする。
 * コア供試体の代わりにあらかじめ準備した現場封かん養生供試体によることができる。その場合の判定基準は材齢28日を超え91日以内のn日において3個の供試体の圧縮強度の平均値から 3 N/mm²を減じた値が品質基準強度以上であれば合格とする。

- 調合管理強度は、以下による。

$$F_m = F_o + mS_n \quad (N/mm^2)$$

$$F_m : \text{コンクリートの調合管理強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$F_o : \text{コンクリートの品質基準強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$mS_n : \text{標準養生した供試体の材齢 } m \text{ 日における圧縮強度と構造体コンクリートの } n \text{ 日における圧縮強度の差による構造体強度補正値 (N/mm}^2\text{)}$$
- 調合強度は標準養生した供試体の材齢 m 日における圧縮強度で表すものとし、下記の両式を満足するように定める。調合強度を定める材齢 m 日は、原則として 28 日とする。

$$F \geq F_m + 1.73\sigma \quad (N/mm^2)$$

$$F \geq 0.85 F_m + 3\sigma \quad (N/mm^2)$$

$$F : \text{コンクリートの調合強度 (N/mm}^2\text{)}$$

$$\sigma : \text{使用するコンクリートの圧縮強度の標準偏差 (N/mm}^2\text{) で、レディーミクストコンクリート工場の実績による。実績のない場合は } 2.5N/mm^2\text{、または } 0.1F_m \text{ の大きい方の値とする。}$$

(d) 検査

- フレッシュコンクリートの塩化物測定は、原則として工事現場で（一財）国土開発技術センターの技術評価を受けた測定器を用いて行い、試験結果の記録及び測定器の表示部を一回の測定ごとに撮影した写真（カラー）を保管し、工事監理者の承認を得る。測定検査の回数は、通常の場合 1 日 1 回以上とし、1 回の検査における測定試験は、同一試料から取り分けて 3 回行い、その平均値を試験値とする。
- スランプの許容差は普通コンクリートの場合、スランプが 8cm以上18cm以下の場合±2.5cm、21cmの場合±1.5cm（呼び強度27以上で高性能AE減水剤を使用する場合は±2cm）とする。高強度コンクリートの場合は、スランプが 18cm以下の場合±2.5cm、21cm以上の場合±2cmとし、スランプフローの許容差は、目標スランプフローが 50cm以下の場合は±7.5cm、50cmを超える時は±10cmとする。
- 使用するコンクリートの圧縮強度試験は、普通コンクリートでは標準養生を行った供試体を用いて材齢 28 日で行い、1 回の試験は、打込み区ごと、打込み日ごと、かつ 150m³またはその端数ごとに 3 個の供試体を用いて行う。3 回の試験で 1 検査ロットを構成する。高強度コンクリートでは、打込み日かつ 300m³ごとに検査ロットを構成して行う。1 検査ロットにおける試験回数は 3 回とする。検査は適当な間隔をかけた任意の 3 台のトラックアジテータから採取した合計 9 個の供試体による試験結果を用いて行う。検査に用いる供試体の養生方法は標準養生とする。
- 構造体コンクリートの圧縮強度の検査は普通コンクリートでは、打込み区ごと、打込み日ごとかつ 150m³またはその端数ごとに 1 回行う。1 回の試験には適当な間隔をおいた 3 台の運搬車から 1 個ずつ採取した合計 3 個の供試体を用いる。高強度コンクリートでは打込み日、打込み区区かつ 300m³ごとに行う。検査には適当な間隔をかけた任意の 3 台のトラックアジテータから採取した合計 9 個の供試体を用いる。検査に用いる供試体の養生方法は標準養生または構造体温度養生とする。
- 使用するコンクリートの圧縮強度の判定は、JASS5による。構造体コンクリートの圧縮強度の判定は、(c) 調合および構造体コンクリート強度による。
- コンクリートの試験は、「建築物の工事における試験および検査に関する東京都取扱要綱」第4条の試験機関で行うこと。
 試験・検査機関名 (都知事登録 号)
 代行業者名 (登録番号 号)
 代行業者とは、試験・検査に伴う業務を代行するものを言う。

(2) 鉄筋

(a) 施工

- 鉄筋はJIS G 3112 (鉄筋コンクリート用棒鋼) に適合するものを用いる。溶接金網および鉄筋格子は、JIS G 3551 (溶接金網および鉄筋格子) に適合するものを用いる。
- 高強度せん断補強筋は、技術評価を取得し、建築基準法第37条の材料認定を受けたものを用いる。
- 鉄筋の加工寸法、形状、鉄筋の継手位置、継手の重ね長さ、定着長さは「新 鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)～(3)」による。
- 鉄筋の継手は重ね継手、ガス圧接継手、機械式継手または溶接継手によることとし、鉄筋径と使用箇所を定め特記による。

表9.4 鉄筋の継手

| 鉄筋継手工法 | 継手の位置等の設計条件による仕様・等級 | | | 鉄筋の径 | 使用箇所 |
|---------|---------------------|-----------------|-----|-------------|------|
| | (1) 引張力最小部位 | (2) (1)以外の部位(注) | | | |
| | | A級 | B級 | SA級 | |
| ■ 重ね継手 | 標準図による | | | ■ D (16) 以下 | |
| ■ 圧接継手 | 告示1463号第2項各号 | | | ■ D (19) 以上 | |
| □ 溶接継手 | 告示1463号第3項各号 | □ □ | □ □ | □ D () 以上 | |
| □ 機械式継手 | 告示1463号第4項各号 | □ □ | □ □ | □ D () 以上 | |

注) (1) 以外部位に設ける継手は、平成12年告示第1463号ただし書きに基づき、日本鉄筋協会、日本建築センター等の認定・評定等を取得した継手工法の等級で、構造計算にあたって『鉄筋継手使用基準 (建築物の構造関係技術解説書 2015)』によって検討した部材の条件・仕様によること。

- 機械式継手および圧接継手および溶接継手は（公社）日本鉄筋協会「鉄筋継手工事標準仕様書」による他、所要の品質が得られるように工事計画および工事管理計画を定めて、工事監理者の承認を受ける。
- ガス圧接の施工は、強風時または降雨時には原則として作業を行わない。ただし、風除け・覆いなどの設備をした場合には、工事監理者の承認を得て作業を行うことができる。
- 圧接技量資格者は、（公社）日本鉄筋協会によって認定された技量適格性証明書を工事監理者に提出し、承認を受ける。
- 機械式鉄筋定着工法に用いる定着板には信頼できる機関による性能証明書等を取得した定着金物を用いる。

(b) 検査

継手部の検査方法
 各継手工法ごとの検査は平12建告1463号による他、具体的な検査方法は、（公社）日本鉄筋協会「鉄筋継手工事標準仕様書」を参照のこと。

表9.5 継手の検査

| 鉄筋継手工法 | 検査の種類 | 検査数量 | 試験方法 |
|--------|-------------|---------------------------|--------------------|
| 圧接継手 | ■ 外観検査 | 全般 | 目視又は計測 |
| | □ 超音波探傷検査 | 抜取り1検査ロット当たり ()箇所又は()% | JIS Z 3062:2014による |
| 溶接継手 | ■ 引張試験による検査 | 抜取り1検査ロット当たり (5)箇所又は()% | JIS Z 3120:2014による |
| | □ 外観検査 | 全般 | 目視又は計測 |
| 機械式継手 | □ 超音波探傷検査 | 抜取り1検査ロット当たり ()箇所又は()% | JRJS 0005:2017による |
| | □ 引張試験による検査 | 抜取り1検査ロット当たり ()箇所又は()% | JIS Z 2241:2011による |
| | □ 外観検査 | 全般 | 目視又は計測 |
| | □ 超音波測定検査 | 抜取り1検査ロット当たり ()箇所又は()% | JRJS 0003:2017による |
| | □ 引張試験による検査 | 抜取り1検査ロット当たり ()箇所又は()% | JIS Z 2241:2011による |

注) 1 抜取り 1 検査ロットは、同一作業班が同一日に作業した継手箇所毎200箇所程度とする。
 注) 2 ガス圧接部分の検査は超音波探傷検査によって行う場合、最初のロットについては引張試験も併用し、1回の引張試験は 5本以上とする。

- 鉄筋の継手の試験・検査は、「要綱」第4条の試験機関、又は第8条の検査機関で行うこと。
 試験・検査機関名 (都知事登録 号)

(3) かぶり厚さ

- 最小かぶり厚さは、表9.6に規定する設計かぶり厚さを10mm減じた値とする。
- 設計かぶり厚さは、コンクリート打込み時の変形・移動などを考慮して、最小かぶり厚さが確保されるように、部材・部材ごとに定めるものとし、表9.6以上の値とする。

表9.6 設計かぶり厚さ(単位: mm)

| 構造体の計画供用期間の級 | 標準・長期 | | 超長期 | | |
|----------------------------------|----------------------------------|-----------------|-----|-----------------|------|
| | 屋内 | 屋外 ^① | 屋内 | 屋外 ^② | |
| 構造部材 | 柱・梁・耐力壁 | 40 | 50 | 40 | 50 |
| | 床スラブ・屋根スラブ | 30 | 40 | 40 | 50 |
| 非構造部材 | 構造部材と同等の耐久性を要求する部材 | 30 | 40 | 40 | 50 |
| | 計画供用期間中に維持保全を行う部材 ⁽¹⁾ | 30 | 40 | (30) | (40) |
| 直接土に接する柱・梁・壁・床および基礎の立上り部分、擁壁の壁部分 | | | | | |
| 基礎、擁壁の基礎・底盤 | | | | | |

注) (1) 計画供用期間の級が超長期で計画供用期間中に維持保全を行う部材では、維持保全の周期に応じて定める。
 (2) 計画供用期間の級が標準・長期および超長期で、耐久性上有効な仕上げを施す場合は、屋外側では設計かぶり厚さを 10mm減じることができる。

- 完成した構造体の各部位における最外側鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
- コンクリート構造体に誘発目地・施工目地などを設ける場合は、建築基準法施行令第79条に規定する数値を満足し、構造耐力上必要な断面寸法を確保し、防水および耐久性上有効な措置を講じれば上記によらなくても良い。

(4) 型枠

- 型枠および支保工の存置期間は、昭63年建告第1655号に基づき下表による。
 表9.7 型枠存置日数 昭和46年建設省告示第110号 昭和63年改正建設省告示第1655号)

| 種類 部位 | せき板 | | スラブ下、梁下 | | スラブ下 | | 梁下 | |
|-------------|-------------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | 基礎、梁側、柱、壁 | スラブ下、梁下 | スラブ下 | スラブ下 | スラブ下 | 梁下 | 梁下 | |
| セメントの種類 | 早強ポルトランドセメント | 普通ポルトランドセメント | 早強ポルトランドセメント | 普通ポルトランドセメント | 早強ポルトランドセメント | 普通ポルトランドセメント | 早強ポルトランドセメント | 普通ポルトランドセメント |
| | 高炉セメントA種 | シリカセメントA種 | 高炉セメントA種 | シリカセメントA種 | 高炉セメントA種 | シリカセメントA種 | 高炉セメントA種 | シリカセメントA種 |
| 存置期間の平均気温 | 15℃以上 | 5℃～15℃ | 5℃未満 | 15℃未満 | 5℃未満 | 15℃未満 | 5℃未満 | 15℃未満 |
| コンクリートの圧縮強度 | 2 | 3 | 4 | 6 | 8 | 17 | 28 | 28 |
| | 5 | 8 | 10 | 16 | 15 | 28 | 28 | 28 |
| | ※ 5.0 N/mm ² | | 設計基準強度の50% | | 設計基準強度の85% | | 設計基準強度の100% | |

※ JASS 5では普通コンクリートの場合計画供用期間の級が標準にあっては 5 N/mm² 以上、長期及び超長期の場合は 10 N/mm² 以上、また高強度コンクリートの場合は 10 N/mm² 以上。
 注) 1 片持ち梁、庇、スパン 9.0m以上の梁下は、工事監理者の承認による。
 注) 2 大梁の支柱の盛替えは行わない。また、その他の梁の場合も原則として行わない。
 注) 3 支柱の盛替えは、必ず直上層のコンクリート打ち後とする。
 注) 4 盛替え後の支柱頂部には、厚い受板、角材または、これに代わるものを置く。
 注) 5 支柱の盛替えは、小梁が壊ってからスラブを行う。一時に全部の支柱を取り払って盛替えをしてはならない。
 注) 6 直上層に著しく大きい積載荷重がある場合においては、支柱（大梁の支支を除く）の盛替えを行わないこと。
 注) 7 支柱の盛替えは、養生中のコンクリートに有害な影響をもたらすおそれのある振動または衝撃を与えないように行うこと。

新鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)

※修正箇所は下線を引くこと

1. 一般事項

- (1) 構造図面に記載された事項は、本標準図に優先して適用する。
 (2) 記号
 d...異形棒筋の呼び名に用いた数値(径) D...部材の成、又は鉄筋内法直径
 @...間隔 r...半径 C...中心線 O...部分間の内法距離 h...部材間の内法高さ
 S T...あばら筋 HOOP...帯筋 S.HOOP...補強帯筋

2. 鉄筋加工

(1) 鉄筋の折り曲げ加工

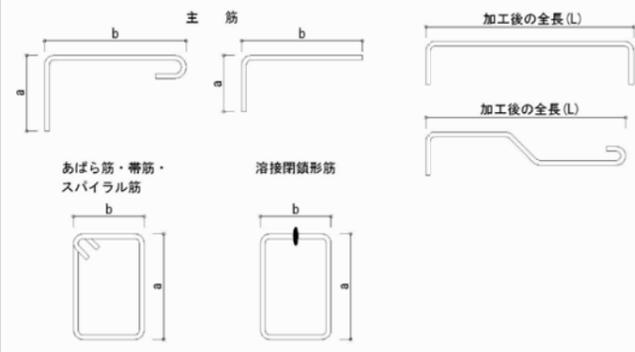
| 図 | 折り曲げ角度 | 鉄筋の種類 | 鉄筋の径による区分 | 鉄筋の折り曲げ内法直径(D) |
|---|--------|---------------------------|-----------|----------------|
| | 180° | SD295A SD295B SD345 | D16以下 | 3d以上 |
| | 135° | SD390 | D19~D41 | 4d以上 |
| | 90° | | D25以下 | 5d以上 |
| | 90° | SD490 | D29~D41 | 6d以上 |

- [注] (1) dは呼び名に用いた数値とする。
 (2) スパイラル筋の重ね継手部に90°フックを用いる場合は、余長は12d以上とする。
 (3) 片持スラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フックまたは135°フックを用いる場合は、余長は4d以上とする。
 (4) スラブ筋、壁筋には、溶接鋼筋を除いて丸鋼を使用しない。
 (5) 折り曲げ内法直径を上表の数値よりも小さくする場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い支障ないことを確認した上で、工事監督者の承認を得る。
 (6) SD490の鉄筋を90°を超える曲げ角度で折り曲げ加工する場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い、支障ないことを確認した上で、工事監督者の承認を得る。

(2) 加工寸法の許容差

| 項目 | 目 | 符号 | 許容差 |
|----------------------|----------------|------------|----------|
| 各加工寸法 ⁽¹⁾ | 主筋 | D25以下 | a, b ±15 |
| | | D29以上D41以下 | a, b ±20 |
| | あばら筋・帯筋・スパイラル筋 | a, b ±5 | |
| 加工後の全長 | L | ±20 | |

[注] (1) 各加工寸法及び加工後の全長の測り方の例を下図に示す。



(3) 鉄筋のあき

異形鉄筋では呼び名に用いた数値1.5d以上、粗骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ25mmのうち最も大きい値。

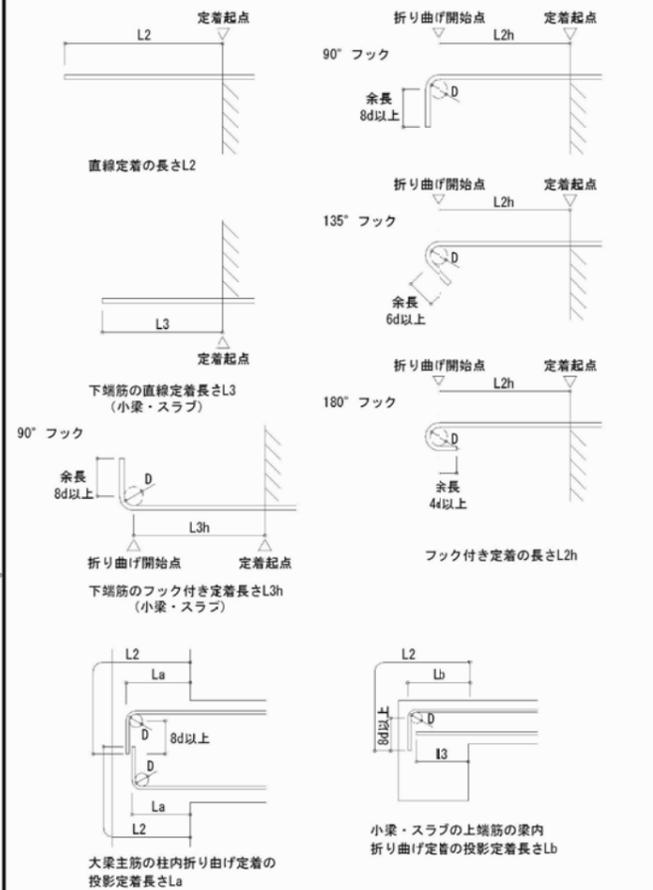
(4) 鉄筋のフック

- a~eに示す鉄筋の末端部にはフックを付ける。
 a. あばら筋、帯筋、および補止メ筋
 b. 煙突の鉄筋(壁の一部となる場合を含む)
 c. 柱、梁(基礎梁を除く)の出すみ部分
 および下端の両端にある場合の鉄筋(右図参照)
 d. 単純梁の下端筋
 e. その他、本配筋標準に記載する箇所

(5) 定着長さ

| 鉄筋種別 | コンクリートの設計基準強度 Fc(N/mm ²) | 定着の長さ | | | | | 小梁下端筋 L3 (フックなし) | スラブ下端筋 L3 (フックなし) |
|------------------|--------------------------------------|------------|-------------|-------------------|-----|-------------|------------------|-------------------|
| | | L2 (フックなし) | L2h (フックあり) | La ⁽³⁾ | Lb | L3h (フックあり) | | |
| SD295A SD295B | 18 | 40d | 30d | 20d | 15d | 20d | 10d | |
| | 21 | 35d | 25d | 15d | 15d | | | |
| | 24~27 | 30d | 20d | 15d | 15d | | | |
| | 30~36 | 30d | 20d | 15d | 15d | | | |
| | 39~45 | 25d | 15d | 15d | 15d | | | |
| SD345 | 18 | 40d | 30d | 20d | 20d | 20d | 10d | |
| | 21 | 35d | 25d | 20d | 20d | | | |
| | 24~27 | 35d | 25d | 20d | 15d | | | |
| | 30~36 | 30d | 20d | 15d | 15d | | | |
| | 39~45 | 30d | 20d | 15d | 15d | | | |
| SD390 | 21 | 40d | 30d | 20d | 20d | 20d | 10d | |
| | 24~27 | 40d | 30d | 20d | 20d | | | |
| | 30~36 | 35d | 25d | 20d | 15d | | | |
| | 39~45 | 35d | 25d | 15d | 15d | | | |
| | 48~60 | 30d | 20d | 15d | 15d | | | |
| SD490 | 24~27 | 45d | 35d | 25d | — | — | — | |
| | 30~36 | 40d | 30d | 25d | — | | | |
| | 39~45 | 40d | 30d | 20d | — | | | |
| | 48~60 | 35d | 25d | 20d | — | | | |
| | 48~60 | 35d | 25d | 20d | — | | | |

- [注] (1) フック付き鉄筋の定着長さL2hは、定着起点から鉄筋の折り曲げ開始点までの距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は定着長さに含まない。
 (2) フック部の折り曲げ内法直径D及び余長は、「鉄筋の折り曲げ加工」の表による。
 (3) 梁主筋を柱へ定着する場合、水平定着長さがL2h確保できない場合は折り曲げ定着とし、全定着長をL2以上とするとともに、水平投影長さをLa以上とし、余長を8d以上とする。尚、Laの値は原則として柱せいの3/4倍以上とする。
 (4) 耐圧スラブの下端筋の定着長は一般定着L2とする。



(6) 継手

■重ね継手

| 鉄筋種別 | コンクリートの設計基準強度 Fc(N/mm ²) | 重ね継手長さ | |
|------------------|--------------------------------------|------------|-------------|
| | | L1 (フックなし) | L1h (フックあり) |
| SD295A SD295B | 18 | 45d | 35d |
| | 21 | 40d | 30d |
| | 24~27 | 35d | 25d |
| | 30~36 | 35d | 25d |
| | 39~45 | 30d | 20d |
| SD345 | 18 | 50d | 35d |
| | 21 | 45d | 30d |
| | 24~27 | 40d | 30d |
| | 30~36 | 35d | 25d |
| | 39~45 | 35d | 25d |
| SD390 | 21 | 50d | 35d |
| | 24~27 | 45d | 35d |
| | 30~36 | 40d | 30d |
| | 39~45 | 40d | 30d |
| | 48~60 | 35d | 25d |
| SD490 | 24~27 | 55d | 40d |
| | 30~36 | 50d | 35d |
| | 39~45 | 45d | 35d |
| | 48~60 | 40d | 30d |
| | 48~60 | 40d | 30d |

- [注] (1) 表中のdは、異形鉄筋の呼び名の数値を表し、丸鋼には適用しない。
 (2) 直径の異なる鉄筋相互の重ね継手の長さは、細い方のdによる。
 (3) フック付き重ね継手の長さは、鉄筋相互の折り曲げ開始点間の距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は継手長さに含まない。

■継手に関する注意点

- 継手位置は、応力の小さい位置に設けることを原則とする。
- D29以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手としてはならない。
- 鉄筋径dの差が7mmを超える場合は、圧接としてはならない。
- ガス圧接継手の形状、および継手の配置は下図による。

・ガス圧接形状(平成12年建設省告示1463号下図のほか、折れ曲がり、焼き割れ、へこみ、垂れ下がり及び内部欠損がないもの)



・圧接継手



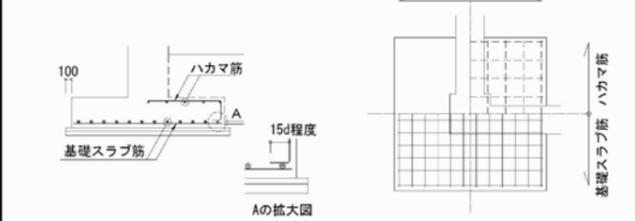
- 溶接継手および機械式継手を用いる場合は、信頼できる機関の評定を受けたA級継手工法とする。
- 非破壊検査は工事監督者が承認した信頼できる検査機関で行うこと。

3. 杭・基礎

(配筋については地震力等の水平力等を考慮して別途検討すること)

(1) 直接基礎

①独立基礎

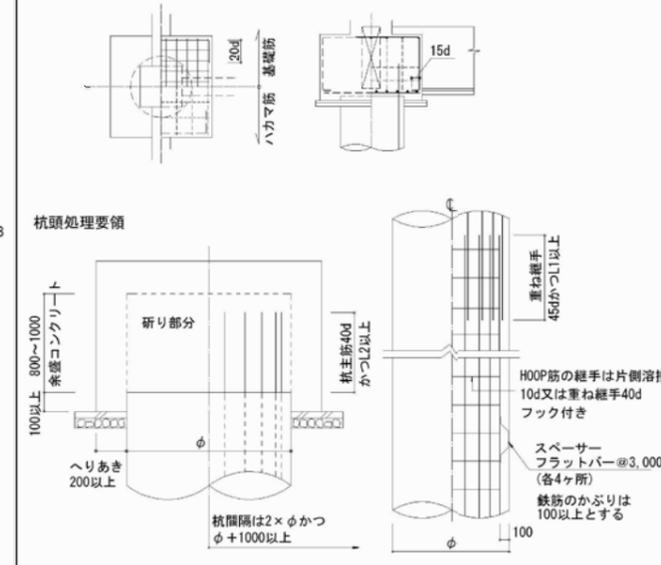


②ベタ基礎



(2) 杭基礎

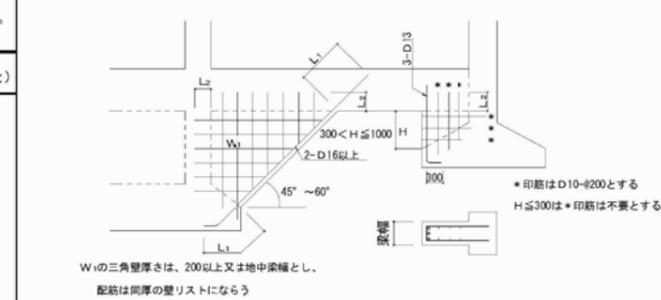
① 場所打ち杭



② PHC杭



(3) 基礎接合部の補強

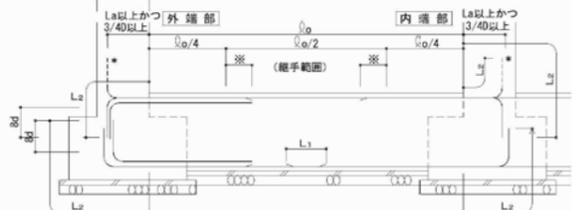


新鉄筋コンクリート構造配筋標準図(2)

※修正箇所は下線を引くこと

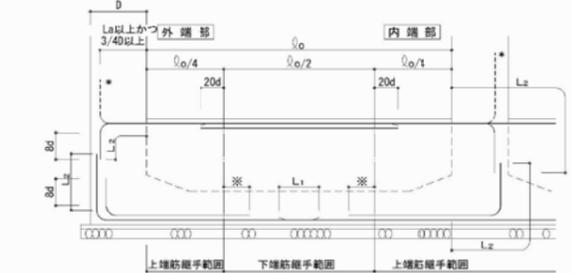
4. 地中梁

(1) 独立基礎、杭基礎の場合(定着、継手)
(長期荷重が支配的な場合の継手は6.(2)大梁継手位置とする。)*上端主筋の定着は、やむをえない場合、上向きとすることができる。



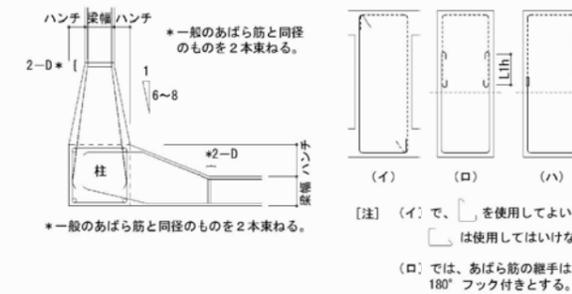
※主筋のカットオフ長さは $lo/4 + 15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は6.大梁の項の表6-1による。

(2) 布基礎、べた基礎の場合(定着、継手)

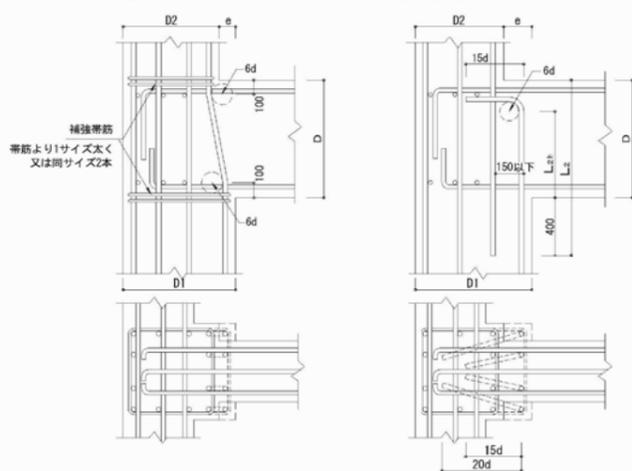


※主筋のカットオフ長さは $lo/4 + 15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は6.大梁の項の表6-1による。

(3) 水平ハンチの場合のあばら筋加工要領 (4) せいの高い梁のあばら筋加工要領

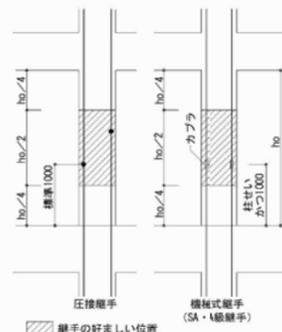


(6) 絞り

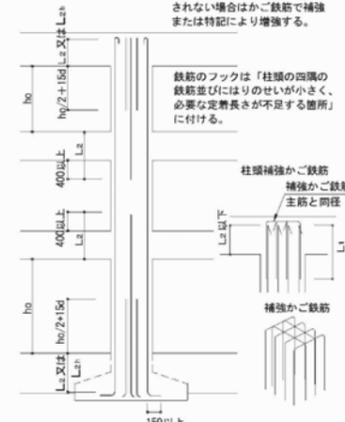


5. 柱

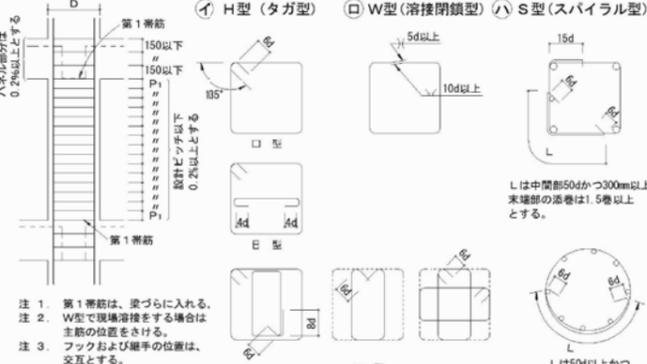
(1) 柱主筋の継手位置



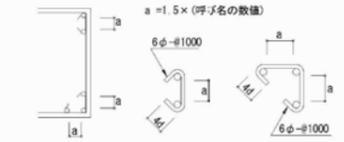
(2) 柱主筋の定着



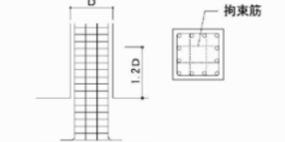
(3) 帯筋



(4) 寄せ筋の保持



(5) 柱脚部の補強



6. 大梁

(1) 定着



(2) 大梁主筋の継手

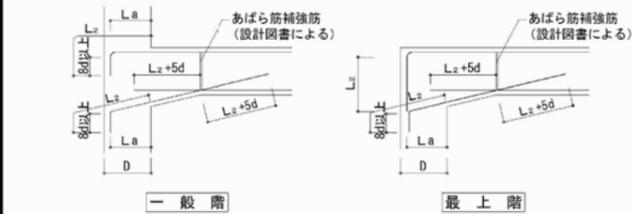
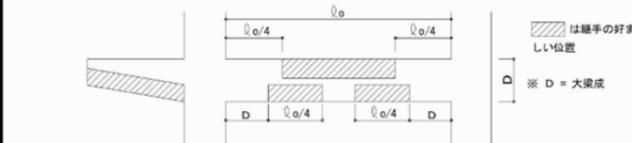


表6-1 特別なカットオフ長さを要する部材 (mm)

| 部材名 | $lo/4$ に加える長さ | 部材名 | $lo/4$ に加える長さ |
|-----|---------------|-----|---------------|
| | | | |
| | | | |
| | | | |

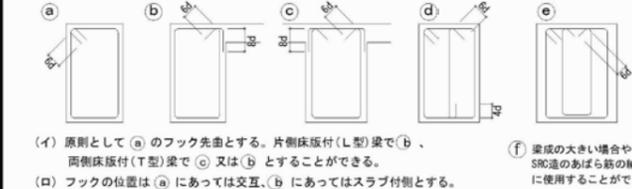
(2) 大梁主筋の継手 (S&級、A級継手を使用する場合の継手位置は特記による。)



(3) あばら筋、腹筋、幅止めの配置



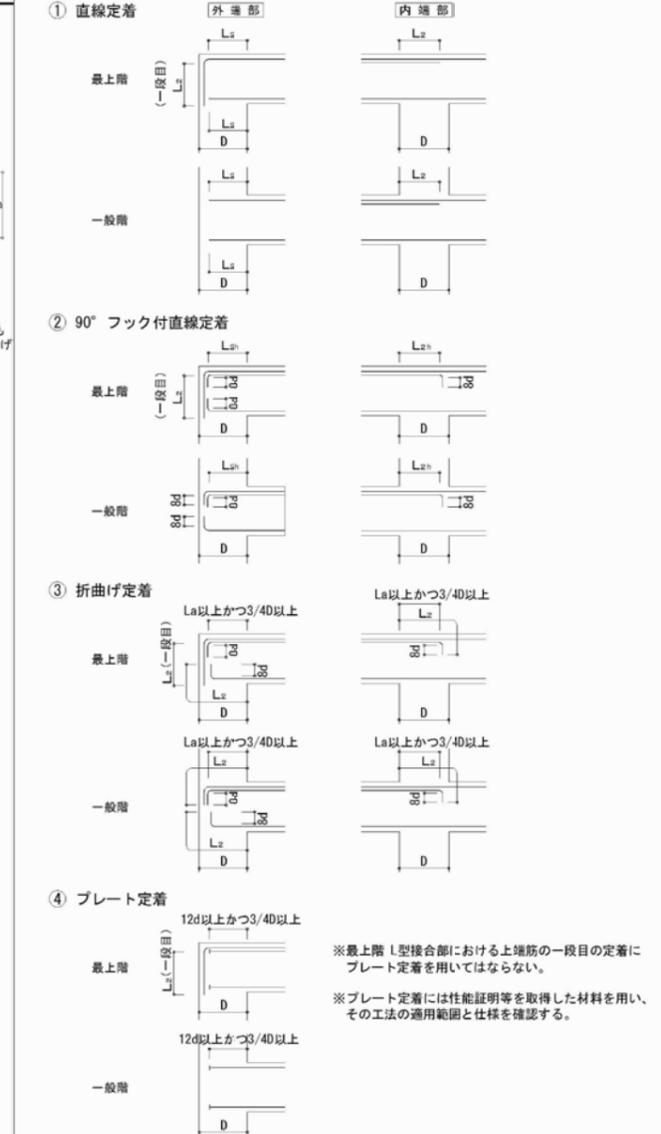
(4) あばら筋の型 (注、床版がない場合は135°以上のフックとする。)



(5) 幅止め筋の本数、加工

| 腹筋 | 幅止め筋 |
|---------------------------|------|
| D < 600 不要 | 幅止め筋 |
| 600 ≤ D < 900 2-D 10 1段 | 幅止め筋 |
| 900 ≤ D < 1200 4-D 10 2段 | 幅止め筋 |
| 1200 ≤ D D 10 @ 300 以内 | 幅止め筋 |
| 1200 以上 D 13 @ 300 以内 | 幅止め筋 |
| 幅止め筋 D 10 @ 1000 以内で割り付ける | 幅止め筋 |

(6) 梁主筋の定着



新鉄筋コンクリート構造配筋標準図(3)

7. 小梁、片持梁

(1) 定着

① 小梁の定着

② 段差小梁の配筋(連続端の場合)

③ 小梁筋の継手位置

④ 片持梁の定着

8. 床版

(1) 定着および継手

① 定着および継手 (一般床スラブ(四辺固定))

② 屋根スラブの補強

(2) 片持スラブ定着及び出隅部補強

① 片持スラブ定着

② 片持スラブ出隅部補強

(3) 床版開口部の補強 (開口の径500以下程度の場合)

| 床版厚さD | 周囲 | 斜め |
|---------------|--------|--------|
| D ≤ 150 | 各2-C13 | 各1-D13 |
| 150 < D ≤ 300 | 各2-C13 | 各2-D13 |
| 300 < D ≤ 500 | 各2-C19 | 各2-D16 |

(4) 床版段差

① 全断

(5) 土間コンクリート

① 軽作業の土間

(6) 釜場

(7) 打継ぎ補強(メダ打断面について)

9. 壁

(1) 定着

① 梁に

② 床に(非耐力壁とスラブが取り合う場合)

③ 壁と壁(平面図)

(2) スリット部(設計図に記入のあるとき)

完全スリット

(3) 手摺、パラベット

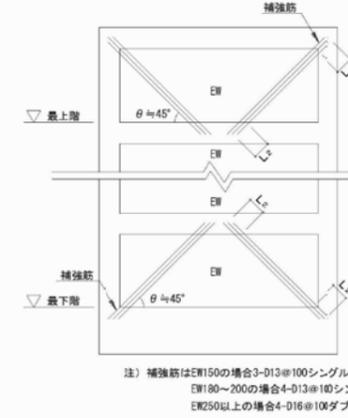
パラベット

手摺

(4) コンクリートブロック帳壁

(5) 耐震壁端部の納まり

(6) 連層耐震壁乾燥収縮の補強筋



10. 柱、梁増打コンクリート補強 (増打するときは事前に設計者、及び工事監理者と打合せのこと)

(1) 柱

●ハッチ部分は増打コンクリートを示す
●ハッチ部分の面積 A cm²

| 補強タテ筋 | A < 500 | 500 ≤ A < 1000 |
|-------|---------|----------------|
| | 3-D16 | 4-D16 |

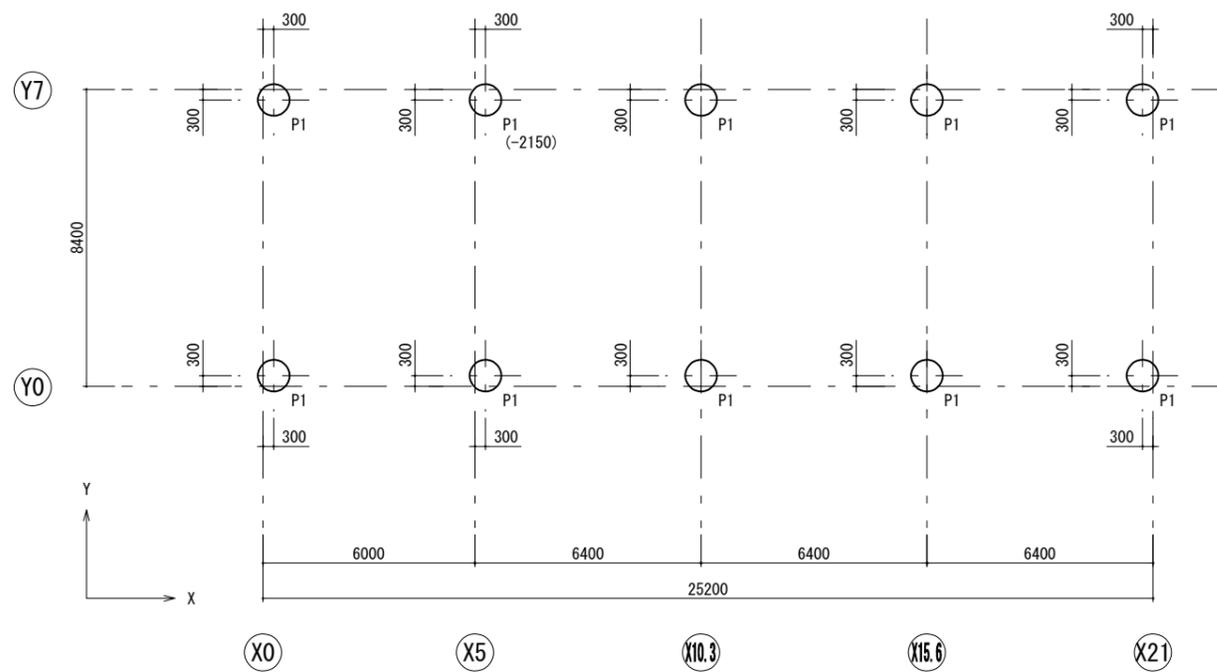
(2) 梁

11. 梁貫通孔補強 (開口補強筋については計算により確認すること)

(1) 設置可能範囲

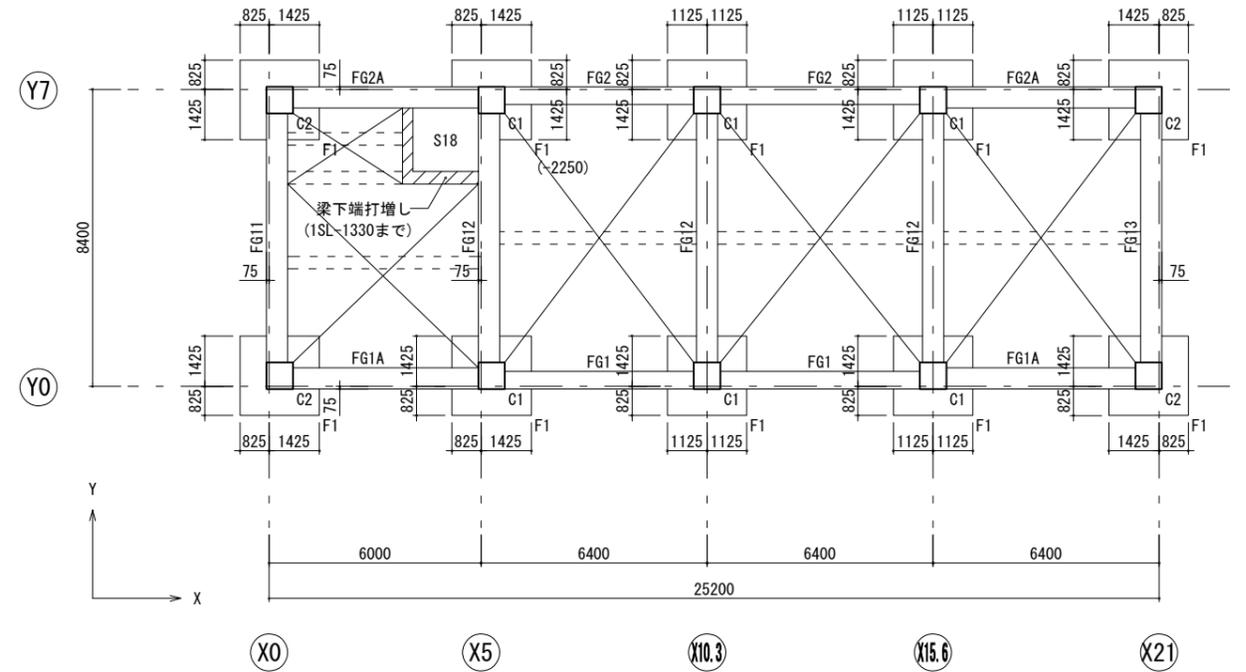
(2) 既製品 (指定条件と異なる場合は、設計者又は工事監理者と打合せのこと)

既製品名
施工前に計算書を出し、承認を得ること。
設計時に使用する評価取得品については計算書を出さず。



杭伏図 S=1/200

特記なき限り下記による。
 1. 杭天端レベルは、GL-2000 とする。
 ()内数値は、GLからの杭天端レベルを示す。



基礎伏図 S=1/200

特記なき限り下記による。
 1. 1SL = GL+100 とする。(1FL = 1SL+100)
 2. 基礎下端レベルは、GL-2100 とする。
 ()内数値は、GLからの基礎下端レベルを示す。
 3. スラブ天端は、1SL-1150 とする。
 4. 基礎梁天端は、1SL-300 とする。
 5. は、梁の増打を示す。
 6. は、埋戻しを示す。

杭リスト

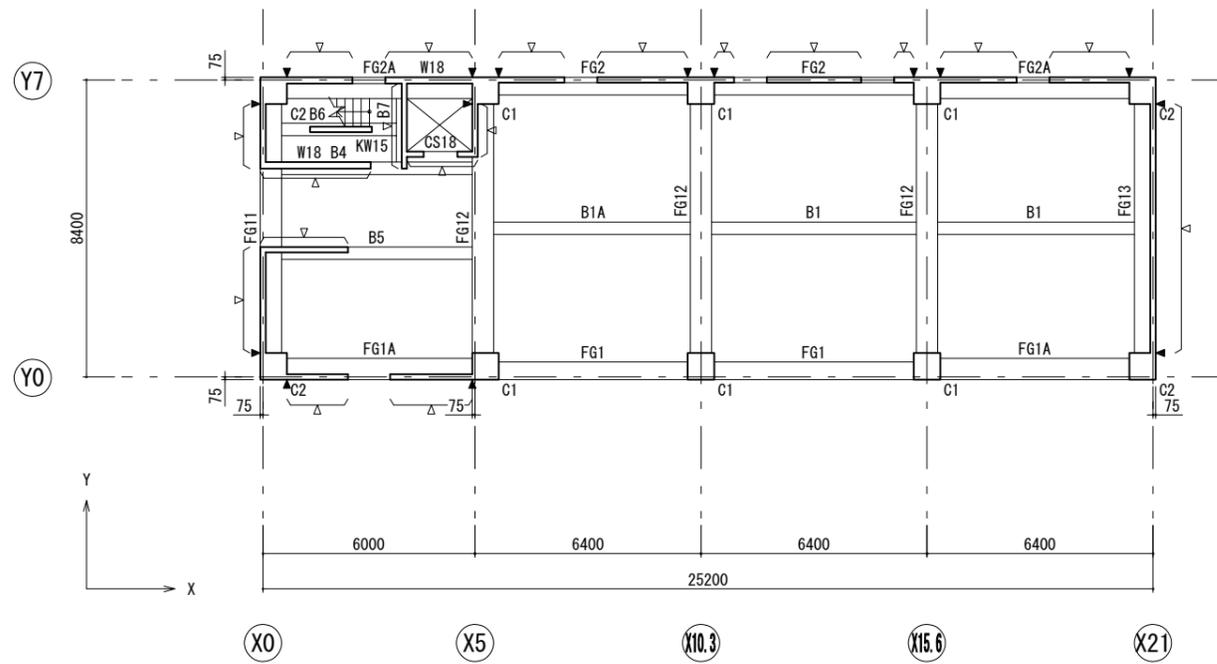
| 記号 | 符号 | 杭径 | 杭全長 (m) | 杭種・杭長 (m) | | | | 長期支持力 (kN) | 本数 (セット) | 備考 |
|----|----|------|------------|------------------|------------------|------------------|-------|---------------|-------------|----|
| | | | | 上杭 | 中杭 | 下杭 | | | | |
| ○ | P1 | φ900 | 21.0 | PHC杭 C種 6.0 m | PHC杭 A種 7.0 m | PHC杭 A種 8.0 m | 3,240 | 10 | | |

工法：埋込み(セメントミルク工法)

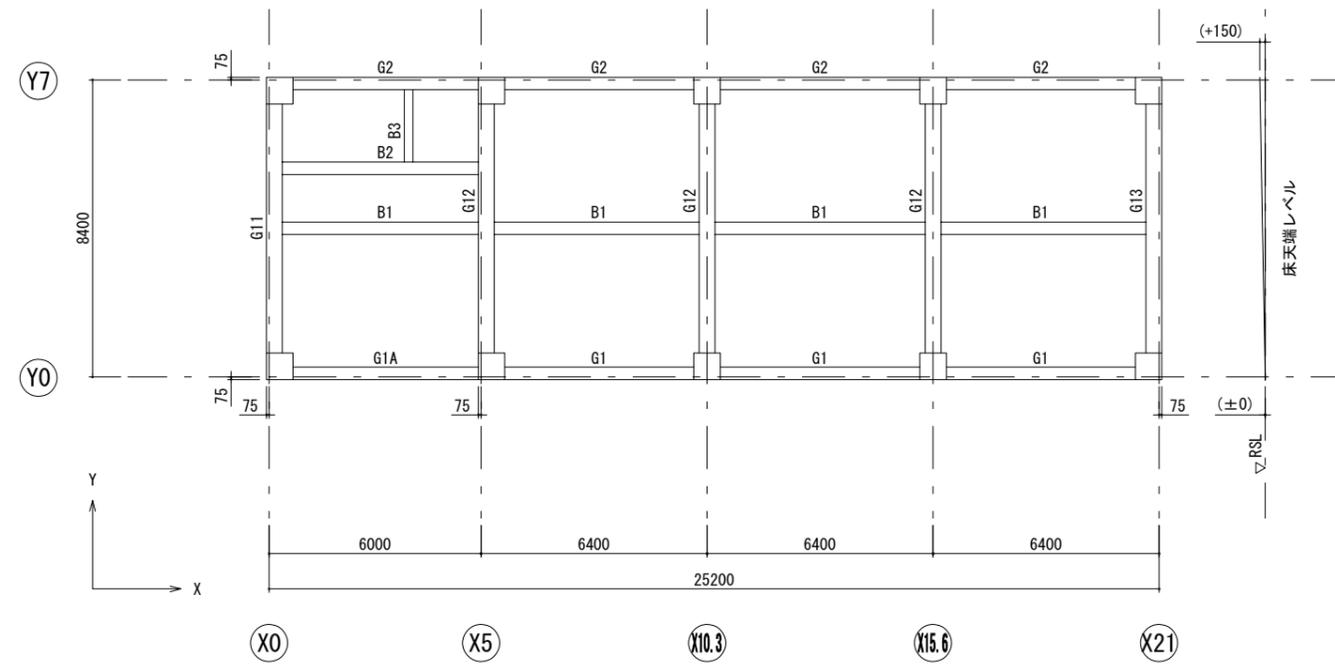
↓ 同等品として下表とする。

| 記号 | 符号 | 杭径 | 杭全長 (m) | 杭種・杭長 (m) | | | | 長期支持力 (kN) | 本数 (セット) | 備考 |
|----|----|------|------------|----------------------|----------------------|----------------------|---|---------------|-------------|----|
| | | | | 上杭 | 中杭 | 下杭 | | | | |
| ○ | P1 | φ900 | 21.0 | MS-hi105 C種 6.0 m | MS-hi105 A種 7.0 m | MS-hi105 A種 8.0 m | - | 10 | | |

工法：Hybridニーディング工法(先端地盤：砂礫地盤、三谷セキサン(株))



1階 床梁伏図 S=1/200

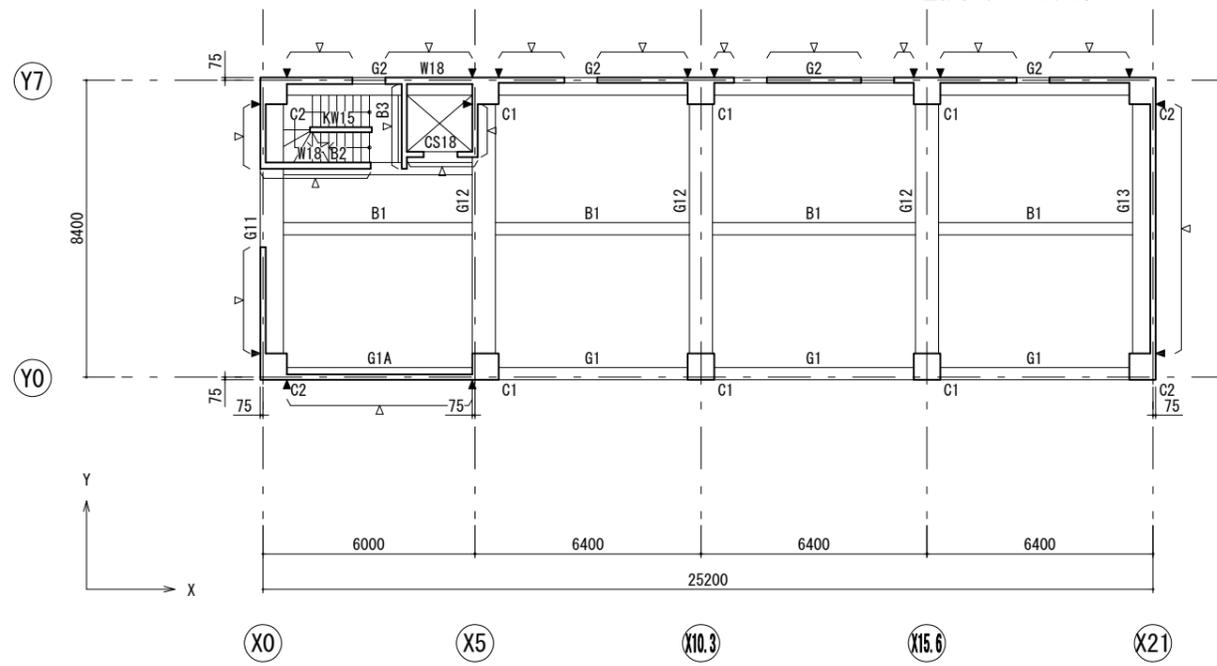


R階 床梁伏図 S=1/200

特記なき限り下記による。
 1. 1SL = 1FL-100 とする。(1SL = GL+100)
 2. スラブ符号は、S18 とする。
 スラブ・小梁天端は、1SL±0 とする。
 3. 基礎梁天端は、1SL-300 とする。
 4. 壁符号は、W15 とする。

5. スラブの主筋方向は、Y方向とする。
 6. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
 7. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。

特記なき限り下記による。
 1. スラブ符号は、S18 とする。
 ()内数値は、RSLからのスラブ天端レベルを示す。
 2. 大梁・小梁天端は、SL±0 とする。
 3. スラブの主筋方向は、Y方向とする。

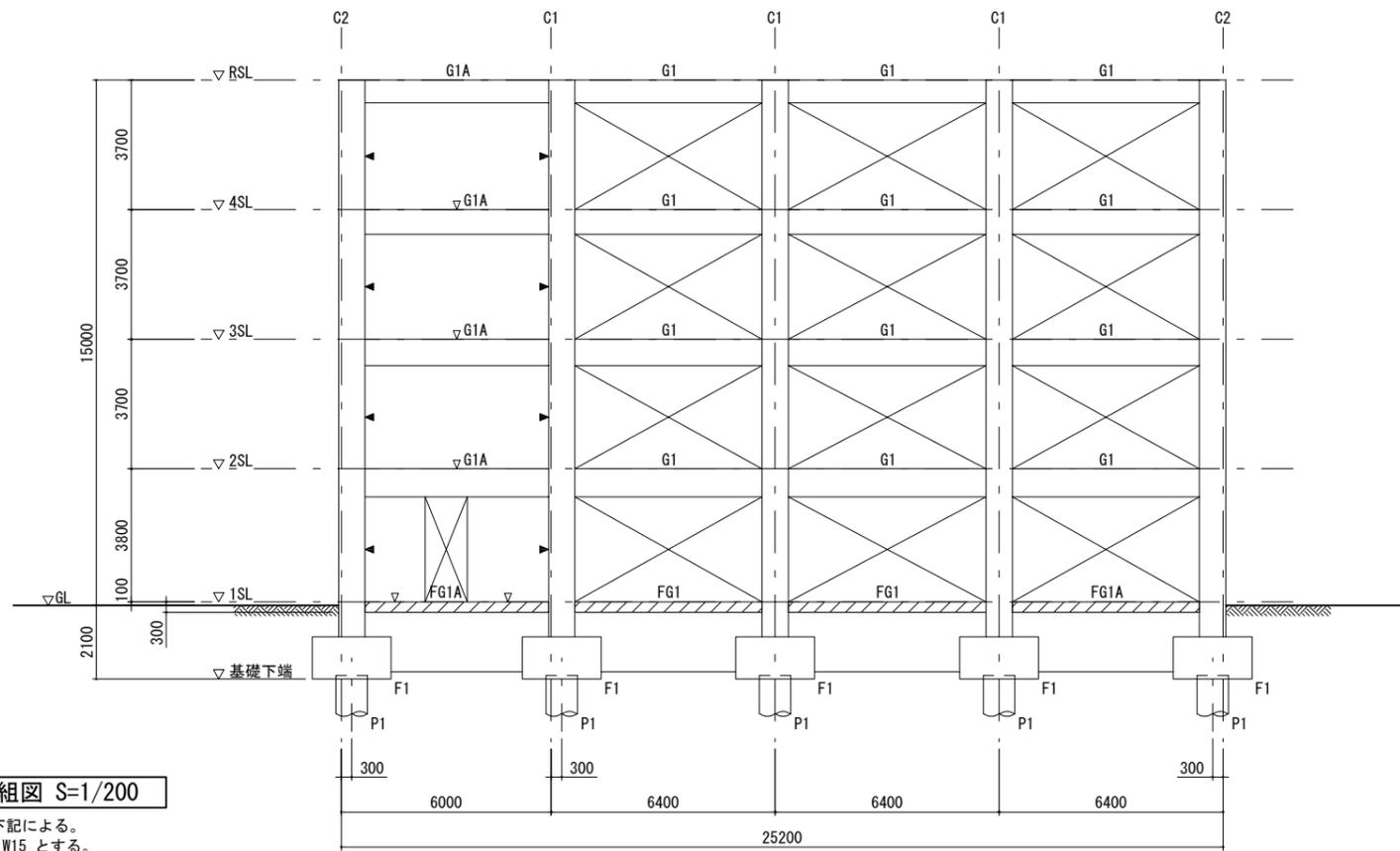


2~4階 床梁伏図 S=1/200

特記なき限り下記による。
 1. SL = FL-100 とする。
 2. スラブ符号は、S18 とする。
 スラブ・小梁天端は、SL±0 とする。
 3. 大梁天端は、SL±0 とする。
 4. 壁符号は、W15 とする。

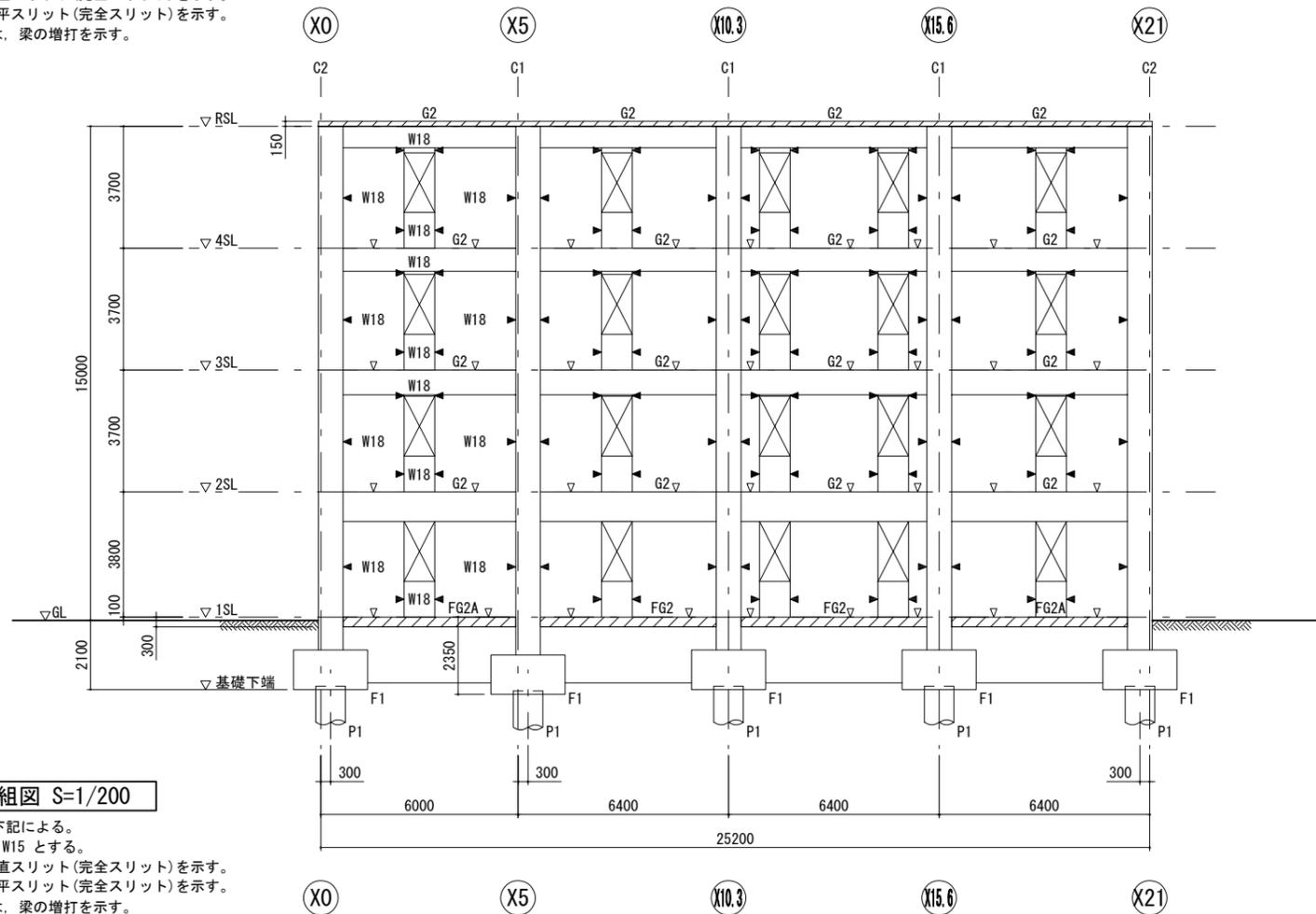
5. スラブの主筋方向は、Y方向とする。
 6. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
 7. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。

| | | | | | | | | | | | |
|-------|---------|------|-----|---------|------|-------|-------|------|------------|----|------|
| プラン 4 | 4階建て事務所 | TYPE | RC造 | DRAWING | 床梁伏図 | SCALE | 1/200 | DATE | 2021.08.27 | NO | S-07 |
|-------|---------|------|-----|---------|------|-------|-------|------|------------|----|------|



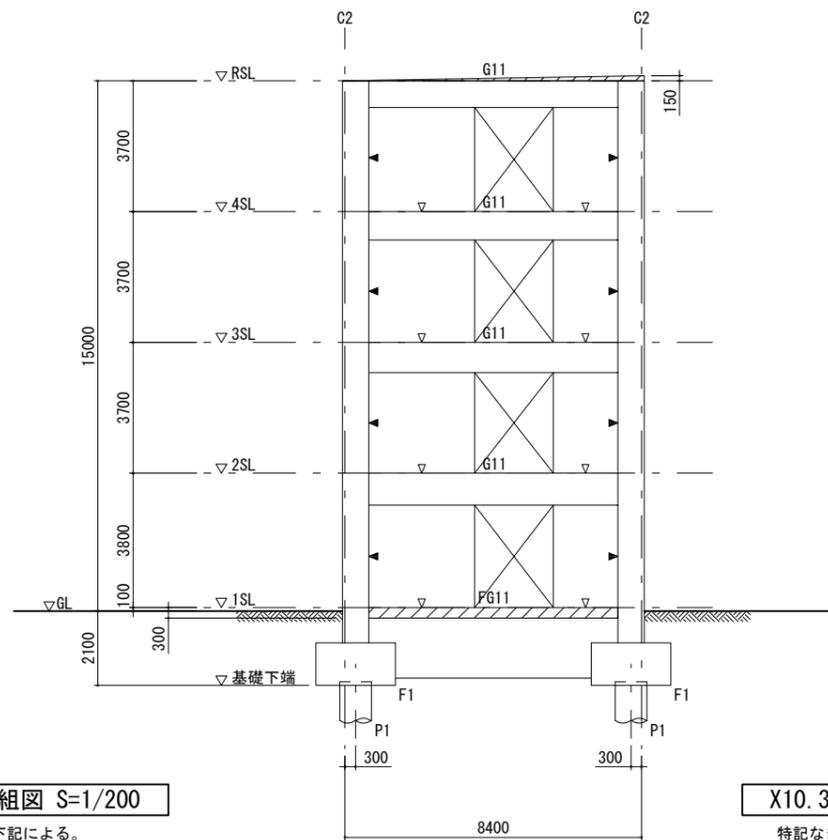
YO通り 軸組図 S=1/200

- 特記なき限り下記による。
1. 壁符号は、W15 とする。
 2. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
 3. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。
 4. は、梁の増打を示す。



Y7通り 軸組図 S=1/200

- 特記なき限り下記による。
1. 壁符号は、W15 とする。
 2. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
 3. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。
 4. は、梁の増打を示す。



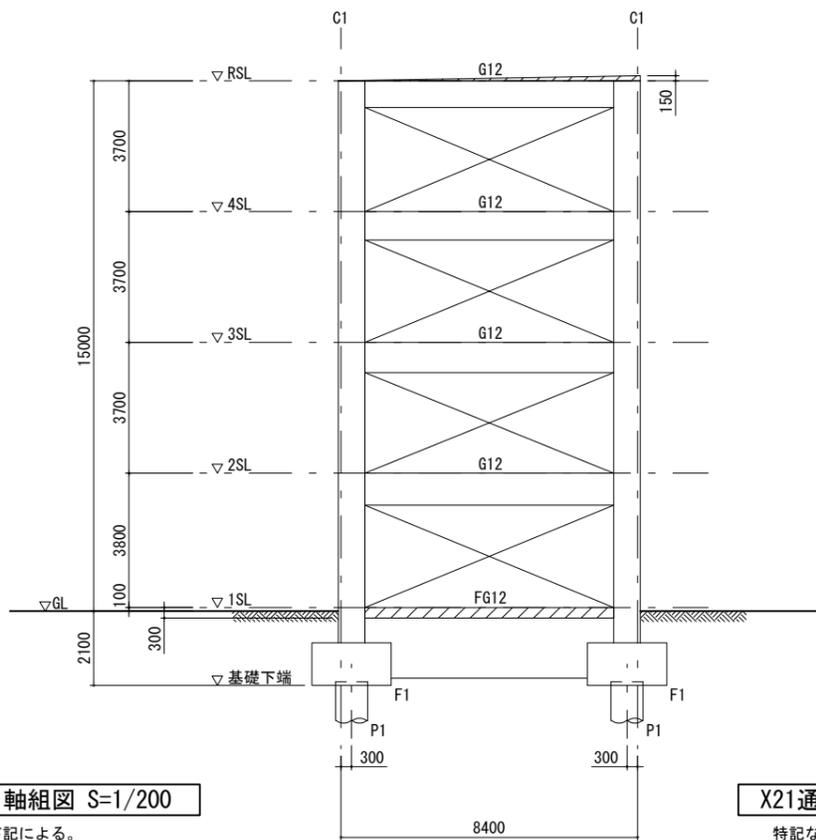
X0通り 軸組図 S=1/200

特記なき限り下記による。

1. 壁符号は、W15 とする。
2. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
3. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。
4. ▨ は、梁の増打を示す。

Y0

Y7



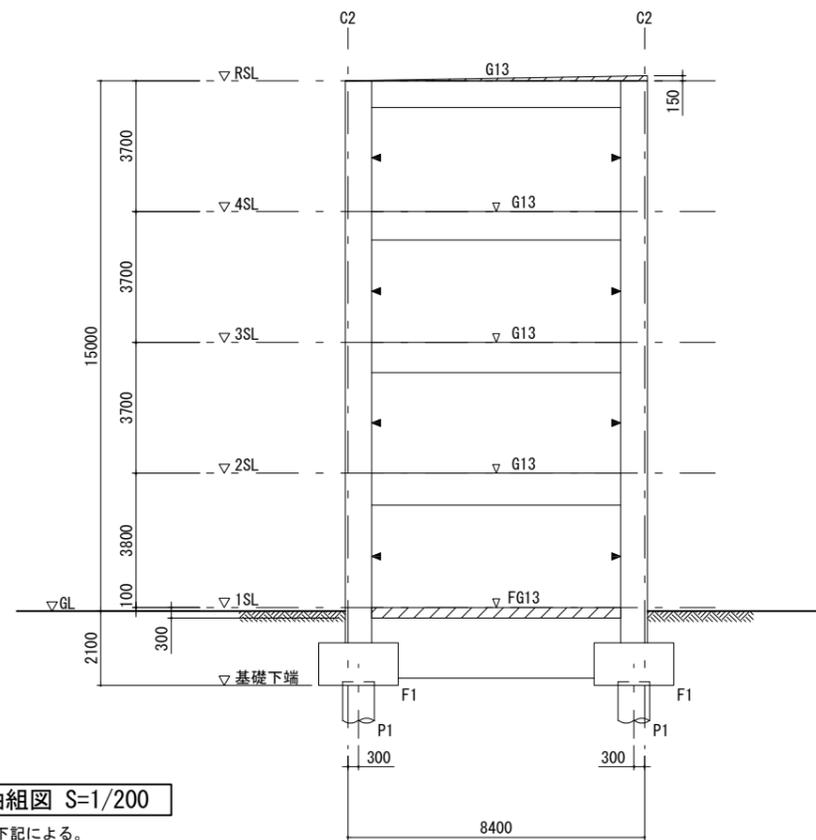
X10.3通り 軸組図 S=1/200

特記なき限り下記による。

1. ▨ は、梁の増打を示す。

Y0

Y7



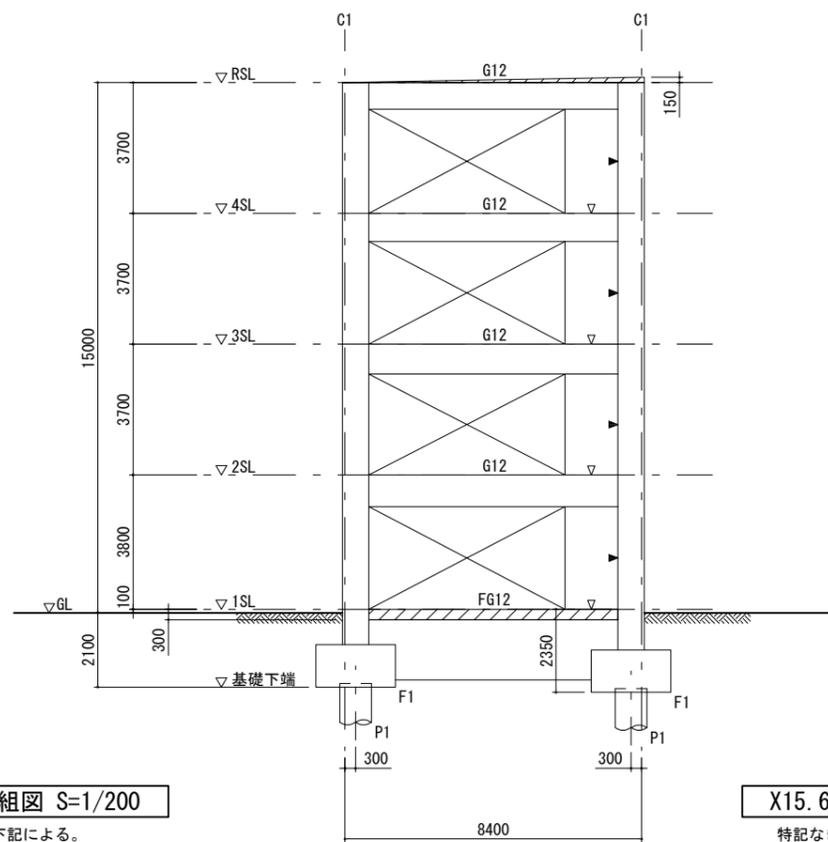
X21通り 軸組図 S=1/200

特記なき限り下記による。

1. 壁符号は、W15 とする。
2. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
3. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。
4. ▨ は、梁の増打を示す。

Y0

Y7



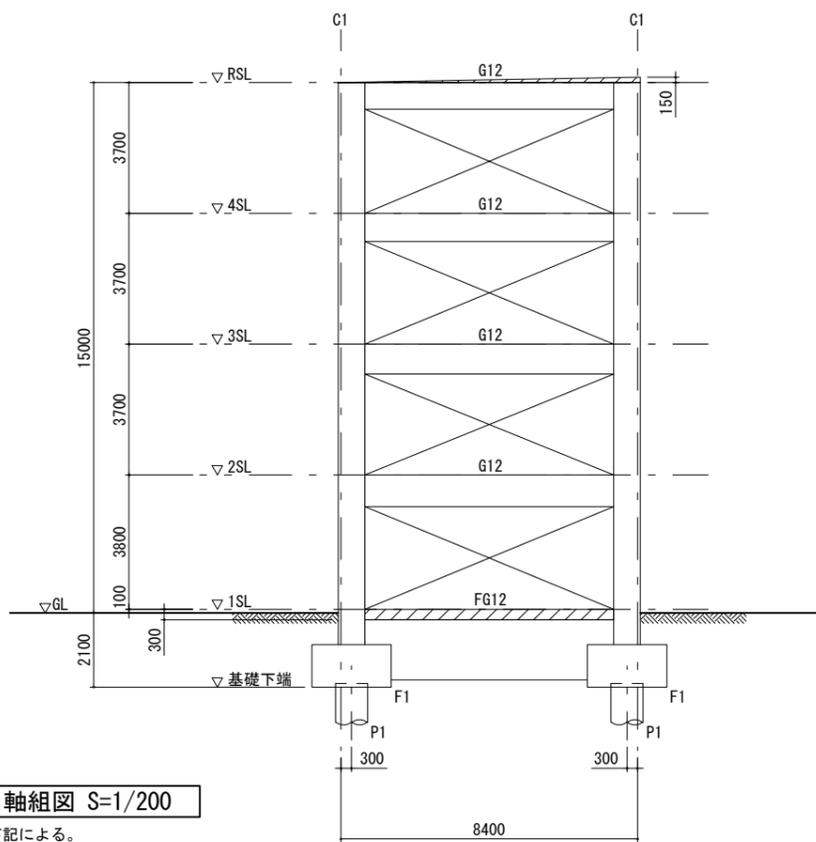
X5通り 軸組図 S=1/200

特記なき限り下記による。

1. 壁符号は、W15 とする。
2. ▼ は、鉛直スリット(完全スリット)を示す。
3. ▽ は、水平スリット(完全スリット)を示す。
4. ▨ は、梁の増打を示す。

Y0

Y7



X15.6通り 軸組図 S=1/200

特記なき限り下記による。

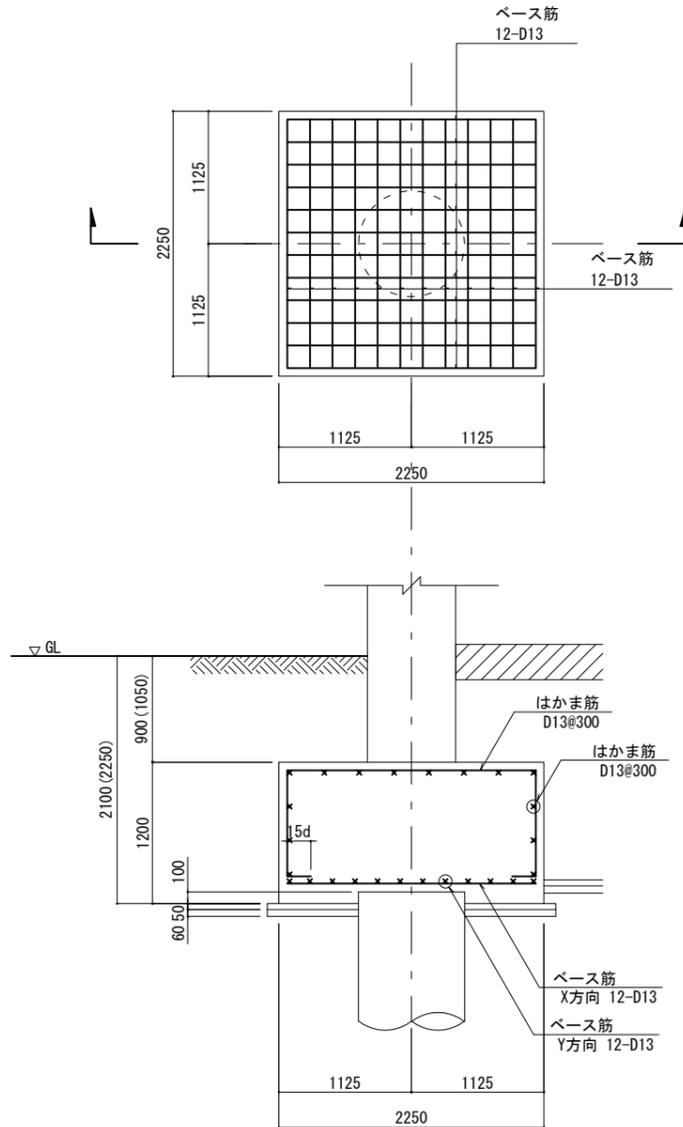
1. ▨ は、梁の増打を示す。

Y0

Y7

基礎リスト S=1/60

特記無き限り下記による。
1. ()内数値は、X5/Y7軸の基礎寸法を示す。

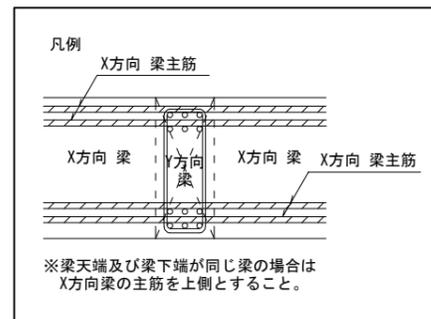


基礎梁リスト S=1/60

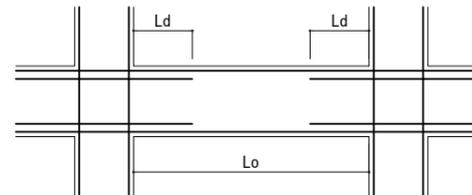
特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

| 符 号 | FG1 | | FG1A | | FG2 | | FG2A | | |
|---------|-------------|-------|-------------|------------------|-------------|-------|-------------|-------|---------------|
| | 端 部 | 中 央 | X0, X21通り端 | 中央・X5, X15, 6通り端 | 端 部 | 中 央 | X0, X21通り端 | 中 央 | X5, X15, 6通り端 |
| 断 面 | | | | | | | | | |
| B X D | 500 x 1700 | | 600 x 1700 | | 500 x 1700 | | 600 x 1700 | | |
| 上 端 筋 | 4-D25/1-D25 | 4-D25 | 5-D25/2-D25 | 5-D25 | 4-D25/2-D25 | 4-D25 | 5-D25/3-D25 | 5-D25 | 5-D25/1-D25 |
| 下 端 筋 | 4-D25 | 4-D25 | 5-D25/2-D25 | 5-D25 | 4-D25 | 4-D25 | 5-D25/3-D25 | 5-D25 | 5-D25 |
| 腹 筋 | 6-D13 | | 6-D13 | | 6-D13 | | 6-D13 | | |
| あ ば ら 筋 | □-D13@200 | | □-D13@200 | | □-D13@200 | | □-D13@200 | | |

| 符 号 | FG11 | | FG12 | | FG13 | |
|---------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------|
| | 端 部 | 中 央 | 端 部 | 中 央 | 端 部 | 中 央 |
| 断 面 | | | | | | |
| B X D | 600 x 1700 | | 600 x 1700 | | 600 x 1700 | |
| 上 端 筋 | 5-D25/4-D25 | 5-D25 | 5-D25/4-D25 | 5-D25/1-D25 | 5-D25/3-D25 | 5-D25 |
| 下 端 筋 | 5-D25/2-D25 | 5-D25/1-D25 | 5-D25/3-D25 | 5-D25/1-D25 | 5-D25/2-D25 | 5-D25 |
| 腹 筋 | 6-D13 | | 6-D13 | | 6-D13 | |
| あ ば ら 筋 | □-D13@200 | | □-D13@200 | | □-D13@200 | |



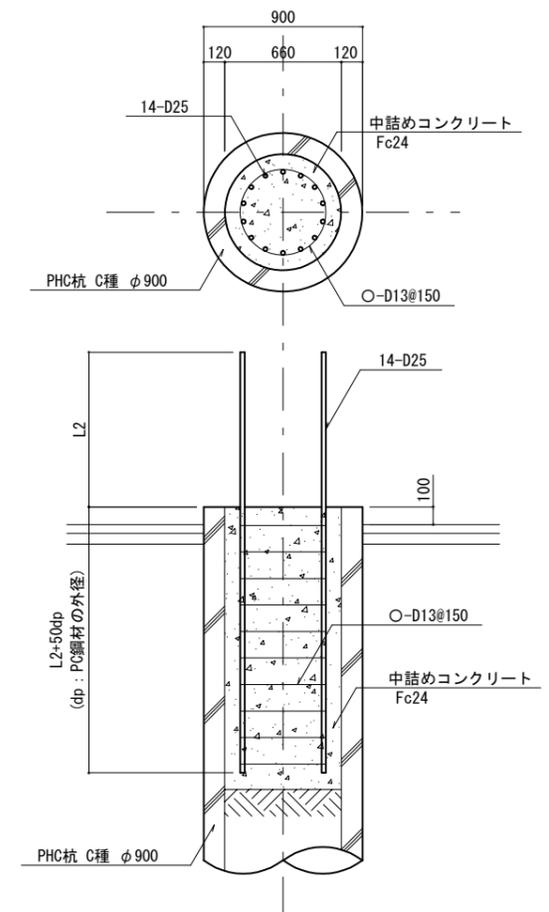
梁主筋カットオフ要領



Ldは、下表の値かつLo/4+15d以上とする。

| 階 | FG1 | FG1A | FG2 | FG2A | FG11 | FG12 | FG13 |
|---|------|------|------|------|------|------|------|
| 1 | 2000 | 2300 | 2300 | 2500 | 2800 | 2800 | 2500 |

杭頭補強要領図 S=1/40



柱リスト S=1/60

特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

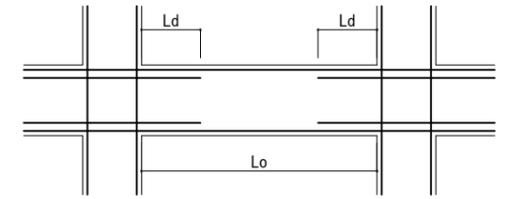
| 符号 | C1 | C2 |
|---------|-----------|-----------|
| 仕口帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 4階断面 | | |
| Lx X Ly | 750 × 750 | 750 × 750 |
| 主筋 | 20-D22 | 16-D22 |
| 帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 備考 | | |
| 仕口帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 3階断面 | | |
| Lx X Ly | 750 × 750 | 750 × 750 |
| 主筋 | 20-D25 | 16-D25 |
| 帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 備考 | | |
| 仕口帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 2階断面 | | |
| Lx X Ly | 750 × 750 | 750 × 750 |
| 主筋 | 20-D25 | 16-D25 |
| 帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 備考 | | |
| 仕口帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 1階断面 | | |
| Lx X Ly | 750 × 750 | 750 × 750 |
| 主筋 | 20-D25 | 16-D25 |
| 帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |
| 備考 | | |
| 仕口帯筋 | □-D13@100 | □-D13@100 |

大梁リスト S=1/60

特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

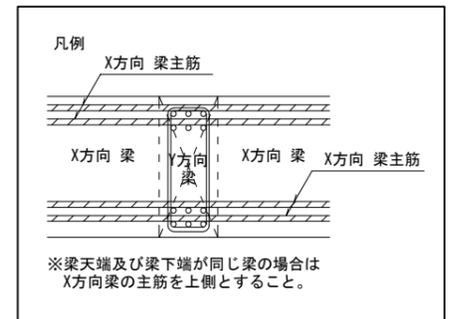
| 階 | 符号 | G1 | G1A | G2 | G11 | G12 | G13 |
|-----|-------|-------------------|-------------------|-------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| RSL | 位置 | 全断面 | 端部 中央 | 端部 中央 | 全断面 | 全断面 | 全断面 |
| | 断面 | | | | | | |
| | B X D | 350 × 650 | 350 × 650 | 350 × 650 | 450 × 750 | 450 × 750 | 450 × 750 |
| | 上端筋 | 3-D22 | 3-D22/1-D22 3-D22 | 3-D22/1-D22 3-D22 | 5-D25 | 5-D25 | 5-D25 |
| | 下端筋 | 3-D22 | 3-D22/1-D22 3-D22 | 3-D22/1-D22 3-D22 | 5-D25 | 5-D25 | 5-D25 |
| 4SL | 位置 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 |
| | 断面 | | | | | | |
| | B X D | 350 × 700 | 350 × 700 | 400 × 700 | 450 × 800 | 450 × 800 | 450 × 800 |
| | 上端筋 | 4-D22/1-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 4-D22/4-D22 4-D22 | 5-D25/2-D25 5-D25 | 5-D25/2-D25 5-D25 | 5-D25/2-D25 5-D25 |
| | 下端筋 | 4-D22/1-D22 4-D22 | 4-D22/1-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22/1-D22 | 5-D25 5-D25 | 5-D25 5-D25 | 5-D25 5-D25 |
| 3SL | 位置 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 |
| | 断面 | | | | | | |
| | B X D | 350 × 750 | 350 × 750 | 500 × 750 | 550 × 850 | 550 × 850 | 550 × 850 |
| | 上端筋 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 5-D22/5-D22 5-D22 | 6-D25/2-D25 6-D25 | 6-D25/3-D25 6-D25 | 6-D25/2-D25 6-D25 |
| | 下端筋 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 5-D22/4-D22 5-D22/1-D22 | 6-D25 6-D25 | 6-D25 6-D25 | 6-D25 6-D25 |
| 2SL | 位置 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 | 端部 中央 |
| | 断面 | | | | | | |
| | B X D | 350 × 800 | 350 × 800 | 500 × 900 | 650 × 900 | 650 × 900 | 650 × 900 |
| | 上端筋 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 5-D22/5-D22 5-D22 | 7-D25/2-D25 7-D25 | 7-D25/3-D25 7-D25 | 7-D25/2-D25 7-D25 |
| | 下端筋 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 4-D22/2-D22 4-D22 | 5-D22/4-D22 5-D22/1-D22 | 7-D25 7-D25 | 7-D25 7-D25 | 7-D25 7-D25 |

梁主筋カットオフ要領



Ldは、下表の値かつLo/4+15d以上とする。

| 階 | G1 | G1A | G2 | G11 | G12 | G13 |
|---|----|-----|------|-----|-----|-----|
| R | - | - | - | - | - | - |
| 4 | - | - | 1700 | - | - | - |
| 3 | - | - | 1900 | - | - | - |
| 2 | - | - | 2000 | - | - | - |



小梁リスト S=1/60

特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

| 符 号 | B1 | | | B1A | | | B2 | | B3 | B4 | | B5 | | B6 | | B7 | |
|---------|-----------|-------|-------------|-----------|-------|-------------|-----------|-------------|-----------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-------------|
| | 位置 | 中 央 | 他 端 | X5通り端 | 中 央 | X10.3通り端 | 端 部 | 中 央 | 全 断 面 | 端 部 | 中 央 | 端 部 | 中 央 | 端 部 | 中 央 | 端 部 | 中 央 |
| 断 面 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| B X D | 350 × 600 | | | 350 × 600 | | | 350 × 650 | | 250 × 500 | 350 × 850 | | 350 × 600 | | 350 × 600 | | 300 × 600 | |
| 上 端 筋 | 3-D19 | 3-D19 | 4-D19/1-D19 | 3-D19 | 3-D19 | 4-D19/1-D19 | 3-D22 | 3-D22 | 2-D19 | 4-D22 | 4-D22 | 4-D19 | 4-D19 | 4-D19 | 4-D19 | 3-D19 | 3-D19 |
| 下 端 筋 | 3-D19 | 4-D19 | 3-D19 | 3-D19 | 4-D19 | 3-D19 | 3-D22 | 3-D22/2-D22 | 2-D19 | 4-D22 | 4-D22/2-D22 | 4-D19 | 4-D19/2-D19 | 4-D19 | 4-D19/2-D19 | 3-D19 | 3-D19/1-D19 |
| 腹 筋 | 2-D10 | | | 2-D10 | | | 2-D10 | | — | 2-D10 | | 2-D10 | | 2-D10 | | 2-D10 | |
| あ ば ら 筋 | □-D10@200 | | | □-D10@200 | | | □-D10@200 | | □-D10@200 | □-D10@200 | | □-D10@200 | | □-D10@200 | | □-D10@200 | |
| 備 考 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

壁リスト S=1/60

特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

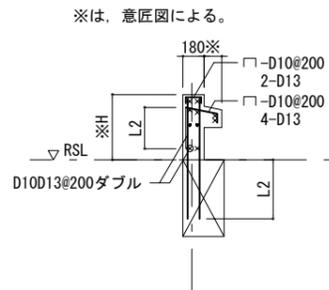
| 符 号 | W18 | W15 | KW15 |
|-----------|---------------|---------------|---------------|
| 壁 厚 | 180 | 150 | 150 |
| 断 面 | | | |
| タ テ 筋 | D10D13@200ダブル | D10D13@200ダブル | D10D13@200ダブル |
| ヨ コ 筋 | D10D13@200ダブル | D10D13@200ダブル | D10D13@200ダブル |
| 開 口 補 強 筋 | タ テ | 2-D13 | 2-D13 |
| | ヨ コ | 2-D13 | 2-D13 |
| | 斜 メ | 2-D13 | 2-D13 |
| 備 考 | | | |

スラブリスト

特記無き限り下記による。
1. 巾止筋 D10@1000 とする。

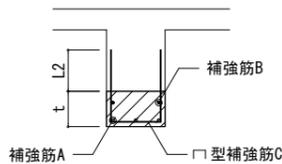
| 符 号 | 版 厚 | 位 置 | 主 筋 方 向 | 配 力 筋 方 向 | 備 考 |
|------|-----|-------|------------|-----------|-----|
| S18 | 180 | 上 端 筋 | D10D13@200 | D10@200 | |
| | | 下 端 筋 | D10@200 | D10@200 | |
| CS18 | 180 | 上 端 筋 | D10D13@200 | D10@200 | |
| | | 下 端 筋 | D10@200 | D10@200 | |

パラペット配筋図 S=1/60



梁増打補強筋要領図

梁上端増打も下表に準ずる。

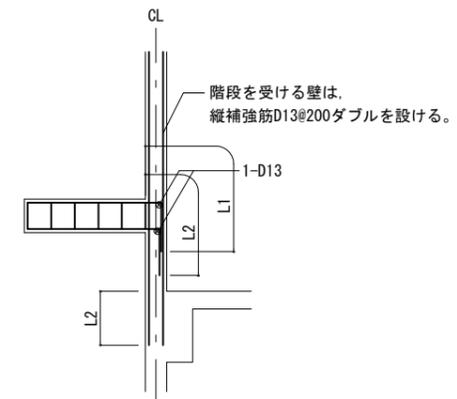


| 部位 | t < 70 | 70 ≤ t ≤ 200 | 200 < t ≤ 300 | 300 < t |
|----|--------|------------------|---------------|----------------|
| A | 補強不要 | D16@300 | D16@300 | 梁主筋と同径、同材質@200 |
| B | 補強不要 | 補強不要 | D10 | D10@200 |
| C | 補強不要 | 梁あばら筋と同径、同材質、同間隔 | | |

階段配筋図 S=1/60



階段主筋は、壁の中心線を越えてから縦に降ろすこと。



構造スリット要領図

アンカー筋は防錆処理を行うこと。

